

# 資料紹介

フランソワ＝グザヴィエ・ヴェルシヤヴ著 大野英士・高橋武智訳 フランサフリック——アフリカを食いものにするフランス 東京 緑風出版 2003年 539p.



正直驚いた。この本が邦訳されるとは。

1998年に出版された本書は、そのスキャンダラスな内容からフランスや仏語圏アフリカ諸国で大きな反響を呼んだ。パリの書店では、同じ著者による続編『Noir Silence, 2000年』とともに、本書が平積みになされていたし、ルワンダの首都キガリの書店でもガラス棚の内側に陳列されていた。

本書は、仏語圏アフリカに関わる者が薄々気づいていたこと——時どきはスクープ紙『カナル・アンシェネ』の紙面を飾ってもすぐに水面下に隠れるフランスとアフリカのインフォーマルな関係を赤裸々に暴露した。ルワンダで、トーゴで、ザイールで、あるいはチャドで、フランスが都合のよい政権を維持するために何をしたか、いかなる人権侵害を犯したかが詳細に記述されている。

著者は「シュルヴィィ」(生存)というアドボカシーNGOに所属する活動家だが、記述にあたっては詳細な注を付し、学術的な参照に耐える水準になっている。訳書では、その原注を全て訳したうえに、細かい訳注まで付されている。告発の書であるため、本書にはアフリカ人政治家やフランス政財界の大立者の名前が多数登場するが、こうした知識に乏しい読者にとって、この訳注は非常に有用である。

冷戦が終結し、また「フランサフリック」のフランス側の中心人物フォカールが1997年に死んだことで、フランスとアフリカの関係も変わりつつある。本書の出版もそうした変化のなかに位置づけられるものであろう。とはいえ、「フランサフリック」の過去、エリート間の濃密な関係が、一朝一夕に消え去ることなどあり得ない。今後も長く、さまざまな形でフランスとアフリカの関係に影響を与え、またアフリカ政治を規定し続けるだろう。現在および今後のアフリカ政治を考える上で、本書が提起する問題はきわめて重い。

(武内進一)

富田正史著 スーダン——もうひとつの「テロ支援国家」 東京 第三書館 2002年 vi+304p.



本書は1990年代以降のスーダンをめぐる政治・経済情勢を、いくつかの切り口から記述しようとした試みであり、著者は自身による前著『スーダンにおける国民統合』(晃洋書房 1992年)の続編と位置づけている。全体は七つの章から成り、内戦、イスラム原理主義、国内避難民、アメリカ、石油開発、「奴隷」といったトピックを取り上げて論じたのち、最終章で2000年以降の出来事を整理している。

1983年に始まった「第二次内戦」に注目する著者は、89年のクーデター以降に内戦の性格が大きく変化したと見る。その原因は「イスラム原理主義勢力」が政府を指導したことに加えて、アメリカなど諸外国の関与が増したことによるとした。

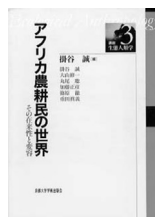
また国内避難民の増大を「第二次内戦」のひとつの特徴とみて、国際人権団体の報告に依拠しながら、その状況を描写している。その同じ人権団体やキリスト教団体から非難されているスーダンの人権侵害が「奴隷」問題であり、その記述には1章が割かれている。この問題は筆者が前著ではふれられなかった論点でもあったようだが、スーダン社会における差別的構造という一点以外にはこのトピックを取り上げる理由が見あたらない。

本書にはやや刺激的な副題が付されているものの、これは必ずしも著者の主張するところではない。いわゆる9.11以降アメリカの関与が増大するなかで、スーダンについても「テロ支援国家」という呼び名が流布していることを捉えているにすぎない。それはスーダンの石油資源に対するアメリカの関心の裏返しでもあり、「石油開発」の章では、まさにこの点が指摘されている。

「あとがき」のあとに「追記」と「付記」が加わるなど、最新の情勢についても盛り込みたいという筆者の強い意識は伝わってくるものの、より多く記述することでかえって論点が拡散してしまったのが残念である。

(望月克哉)

掛谷 誠編 アフリカ農耕民の世界  
——その在来性と変容（講座・生態人類学3） 京都 京都大学学術出版会 2002年 xxviii + 200p.



本書は、人類学のフィールドワークをもとに、「在来農業の集約性」をキーワードとして、アフリカの在来農業に従事する農民を検討した5本の論考と、編者による総論からなっている。編者は、集約的な在来農業に焦点を当てる理由として、伊谷純一郎に始まる「自然埋没者」（例えば焼畑農耕民）の研究は「人類社会の進化の解明」という目的の一面であり、対になる「開拓者」（集約的な在来農業）の研究が欠落していたことを指摘している。加えて、「近代的な農業」が新たな問題を引き起こす事例が見られ、農業生産の増加のためには、在来の集約農業の役割を検討する必要があることを挙げている。

編者によれば、「非集約的」な農業は、できるだけ少ない生計努力によって安定した食物を確保しようとする「最小生計努力」の傾向を持つ。食物は均等に分配されるため、貧富の差の少ない平等な社会が形成される。第2章から第5章の論考は、アフリカの集約的な在来農業について報告し、集約性と生活様式に関する仮説を検証する材料を提供している。タンザニアのマテンゴによるンゴロ農法、エチオピアのコンソによるストーン・テラシング（段々畑）などの、膨大な労働を投入して生産性を高めようとする事例は、まるでアジアの農業を見ているようであり、新鮮な驚きを覚える。第1章は、近代的な集約農業が焼畑農耕民に与えた影響について報告している。

それぞれのフィールドワークの報告は興味深いのであるが、各報告の比較から得られる含意は残念ながら明確でない。農業集約化の要因、集約性と生活様式、アフリカの在来的な集約農業の特性などの論点は、今後の研究課題として残されている。また、主張が十分に裏づけられていない部分も見られる。例えば、非集約農業と最小生計努力の関係について、十分に論理的な議論は展開されていない。原著の綿密なフィールドワークによる論証の積み重ねを生かした今後の分析が待たれる。

（福西隆弘）

井野瀬久美恵著 黒人王，白人王に  
謁見す——ある絵画のなかの大英帝国 東京 山川出版社 2002年 198p.



「日々の農作業に追われる貧しいアフリカ人女性」、「何重にもアクセサリを纏ったマサイ人青年」などアフリカの人々が、ニュース写真や芸術作品としてメディアに登場することは少なくない。もちろん、そのキャプションにモデルの名前が付されることはめったにない。特定の個人を写したものとしてそれら肖像を取り扱おうとする発想（と、時には必要そのもの）がそこにはないからである。

ロンドンのナショナル・ポートレイト・ギャラリー2階に展示されている一枚の絵画にもやはり名前のないアフリカ人男性が描かれている。ヴィクトリア女王がひとりの黒人に聖書を手渡す場面を描いたこの有名な作品「イングランドの偉大さの秘密」は、イギリス植民地支配を貫く帝国観——聖書を自国の「偉大さの秘密」とし、女王がそれを黒人に授けるという図式！——を端的にあらわした「傑作」として美術史のなかで取り扱われてきた。画面には他に5人の白人が描かれているが、女王の夫、イギリス首相、女王付きの女官など、それぞれ誰を描いたかについて速やかに同定されたという。他方、女王の前で跪いている黒い肌の人物については、名前の特定すらされず、「聖書を通じて近代に触れようとするひとりのアフリカ人」ということで美術史家はこと足れりとしたのだ。アフリカ人を匿名性の中に留め置くこうした取り扱いが、美術史家の間だけのものではなく、冒頭のキャプションの例が教えるように、今日のわたしたちの日常をも構成している。

こうした取り扱いがひとつの「型」にすぎないことを見事に暴いてみせるのが本書である。描かれた黒人男性にも名前があるはずだ。彼は「誰」なのか——著者がこの疑問を追究に値すると見なしたことで、重い意義を孕む。推理小説仕立ての展開で謎は少しずつ解かれていくことになるが、これ以上そこに踏み込むのはルール違反であろう。ぜひ手にとって、結末を見届けられたい。

（津田みわ）

池谷和信著 国家のなかでの狩猟採集民——カラハリ・サンにおける生業活動の歴史民族誌 大阪 国立民族学博物館 2002年 xxii+298p.



刺激的な本である。カラハリ砂漠のサン（ブッシュマン）といえ、外部世界と隔離したところで自然と巧みに調和した生活を営む狩猟採集民、というイメージがつきまとう。しかし著者はこのイメージを根本から覆し、サンの社会が植民地政策や独立政府の政策と密接に関わり合いながら、歴史的な変容を遂げてきたことを明らかにしている。

サン社会の変容を分析するために、筆者は社会史研究と生態人類学とを統合した歴史民族学のアプローチを採用する。著者がおこなったフィールドワークは通算16回、延べ26か月に達している。その間に著者は、生態人類学的な調査に加えて公文書館での歴史史料の検討もおこない、それらの成果を統合する形で過去100年間のサン社会の変容のあり方を再構成している。

そこで明らかにされるのは、われわれが持つ「狩猟採集民サン」の思い込みがいかに一面的であるかという事実である。例えばサンの人々は、植民地時代からすでに農耕や交易を含んだ生業活動をおこなっており、徴税と労働力移動により国家システムの中に組み入れられていた。また「弓矢猟をする狩猟採集民」というイメージができあがったのは、自然保護区で銃を使った猟が1961年に政府によって禁止された結果であった。さらにボツワナ政府の定住化政策の中で、狩猟は食料獲得のためだけでなく、肉や毛皮を販売するための商業活動の一環となってきた。これらはいずれも、サンが伝統的な生活を営む狩猟採集民ではなく、歴史上、政府の政策や外部世界の動向と密接に関連しながら変容を遂げてきたことを示している。

日本の生態人類学は層が厚く、優れた研究蓄積が多く存在する。しかるに著者はあえて、「本書は、これまで生態人類学者が得意としてきた『伝統主義』を批判する目的で書かれた」（p.267）と明言する。また、「わが国の40歳代や30歳代の研究者においては、研究の方向性を見いだすパラダイムを失ったかのように見える」（p.x）とも述べている。随所でこのような刺激的な主張を展開する本書は、先達の学問的到達点を超えるための「挑戦」にこそ、研究の面白さがあることを思い出させてくれる。（高根 務）

寺谷亮司著 都市の形成と階層分化——新開地北海道・アフリカの都市システム 東京 古今書院 2002年 iv+344p



サブタイトル中に併記される「北海道」と「アフリカ」をつなぐものは何だろう、と本書を手にとった読者がいるかもしれない。著者はこの2空間を「新開地」、つまり近代以降に開発や植民が本格化した国家または地方スケールの地域としてつないだ。その発想は南アフリカ・ケープタウンと北海道・小樽の「類似した」景観の観察を通して、両者の「ゲートウェー都市」としての性格を見いだしたことにある。

著者は伝統的な歴史都市、封建都市に基盤をおかない新開地の形成過程に注目し、その開発の起点となるゲートウェー都市と、それを中心とした周辺都市・地域の間に現れるヒエラルキー構造である「都市システム」の空間関係を、数多くの歴史地図や立地データを駆使して描いている。その手法は地理学のオーソドクシーから揺れることはない。著者は「強権的な国家統合や地域政策によって、国家の成立経緯と都市システムが密接な関係にある」（32ページ）ことから都市システムの変遷を研究する意義があるとしている。その主張には何ら異議を感じないが、評者は事業所の立地やディフュージョンの分析で都市システムの変遷を実証するデータの整理に費やされた紙幅に比較して、国家や地方の成立においてゲートウェー都市を中心とする地域の果たした役割の説明や、そこに構築された都市システムと国家の関係への説明に若干の物足りなさを感じた。しかしながら著者の意識が、ポストコロニアリズム研究に似たものであるとするならば、「新開地」概念については注意深い議論の余地があるけれども、国内植民地化、黒人ホームランド、植民都市などの社会空間的位置づけを、都市のヒエラルキー確立の過程を通して検証し、都市研究の面から材料を提供したという意義はあろう。

ヨハネスブルグ／ヨハネスバーグ、カルツーム／ハルツーム等の地名表記が統一されていない点が気になった。

（吉田栄一）

大林公子著 アフリカの「小さな国」  
——コートジボワールで暮らした  
12ヶ月 東京 集英社 2002年  
219p.



表題のとおり、コートジボワールでの一年の生活を綴った滞在記であるが、著者の視点が非常にバランスがとれているとともに、主婦独特の安定感があり、この種の書き物にありがちな異国文化の盲目的な礼賛や批判に偏ることなく、落ち着いて楽しめるエッセーとなっている。

著者は、研究者の夫の赴任に同行してコートジボワールの首都アビジャンに滞在する。料理のうまいメイドに恵まれ、彼女からアフリカ料理、お店の情報、生活習慣などコートジボワール人の生活を学び、彼女の家族を通じて伝統社会を体験する。また滞在の後半には建国以来はじめてのクーデターが発生し、社会的な混乱を経験することになる。こうしたさまざまな体験が、一主婦の感覚として語られるところが、本書の面白さであろう。著者は、現地で起こる出来事や出会う人々を決して不要に恐れず、心配したりしない。十分な柔軟性をもって受け入れ、積極的に楽しもうとする姿勢が読んでいて快く感じられる。むしろ、それまでの著者のアフリカ滞在経験がそうした余裕を生み出しているのかもしれない。滞在経験のある人によくみられる、アフリカ社会をどこか皮相的に捉える視線は、そこには全くみられない。コートジボワールでの暮らしを自然に受け入れている様子がうかがえる。

多くの日本人にとって、アフリカは紛争、貧困、野生動物といったイメージしかないであろうが、本書を読めば、アビジャンの人々は東京の人々と同じように毎朝通勤したり、市場で買い物をしたり、故郷とのつき合いをこなしたり、ダンスや歌を楽しんだり、将来を夢見ていることを分かってもらえると思う。「アフリカってどんなところ？」と聞かれた時に、是非薦めたい一冊である。

(福西隆弘)

坂田 泉著 ムチョラジ! 東京  
求龍堂 2001年 159p.



「ムチョラジ」とはスワヒリ語の絵描きさん。本書はケニアで派遣専門家として教壇にたった建築家の滞在記で、58枚の挿絵はすべて著者の作品でもある。画家と建築家の道を選ぶのに悩んだという著者は、ナイロビ滞在中、週末毎に都市の風景やそこで暮らす普通の人々をスケッチする。「ムチョラジ」さんの周りに集まる見物客の反応や、見物客と著者のやりとりが挿絵となっている水彩画のエピソードとして語られている。時系列で並べられたエピソード集に、勤務する建築学教室での顛末記や、建築家としての景観観察を通じたナイロビ都市論が織り交ぜてあり楽しい。描写されているのは、露店やストリートチルドレンといったケニアの日常の風景である。その観察を通じて、普通のケニア人が貧困のなかで生きようとする「道端の力」が造営した露店の賑わいや職人の街にこそナイロビがあると著者は考え、そして教育のために先進国から自分が持ち込んだ技術と、それがかつて作り上げた近代都市ナイロビの矛盾を「風土や社会から自由になった力は恐ろしい」(98ページ)と論じているところは、おおかたのアフリカ都市論とも共通する。

彩管が揮われた挿絵の方は、1年の滞在期間を通じた著者の作風の変化が興味深い。初期のスケッチでの描画や着色は細く柔らかというよりも弱く、ランドスケープに点在するケニア人の顔がほとんど描かれていないが、後半では描写が太く明確になり、また着色にも濃厚な色を多用して、対象の表情が力強く描かれている。画家の色彩感覚のローカライゼーションとともに、ダイアログと描写を重ねて得ることのできた筆者のナイロビ景観観察の変遷を感じる。日本人の描いたアフリカとして海外でも紹介されることを望みたい。

(吉田栄一)